

南大阪の旗

II-3
72.10.20

南大阪の旗編集委員会発行
連絡先 大阪市西成区東田町44野鳥の会

30円

★釜ヶ崎レポートへその3 1

★光洋争議についてへその3 5

★へ坪がケケレ 年向三巨名の行旅死者の死

を生きかすための

★搾取なき自由の国崗いとらん 8

★資料 釜ヶ崎に於ける弾圧状況

へ七二年五月一日〜九月十四日 10

★釜ヶ崎は活火山である 11

★持続した崗いの其盤を 12

★共同作業の一尺の拡大を 13

釜ヶ崎レポートへその3

《夏祭りへの弾圧》

八月十三日から三日間にわたって通称三角公園を会場に「釜ヶ崎夏祭り」が挙行された。

それは五、二八以降の鈴木組を踏台とした弾圧の下で活気にみちみながら準備されたその前夜であった。

会場の三角公園は西成署から百メートルと離れて

いない。とどろかぬわす、ノミ屋が火手を振って前

売できるところであり、同時に中小博徒暴力団の最

大のテラ銭かせぎの場なのである。彼ら寄生虫共は

ありとあらゆる方法で労働者を腐臭に満ちた場に引

きずり出そうとする。むろんホリ公は見て見ぬふり

マワサの暴力支配と警察の暴力支配とをならす旨とするものではない以上、そのことは当然のことであると見える。

「夏祭り」が竹竹者自らから自らを築る場である以上、身造りのささやみなどのであつて、それを三角公園という場で貫徹し切ることには、非常に重要な意味をもつ。奴らにとつてはまさに「犯罪の」ゆゑである。当然のごとく、右翼、マワサ、警察、という三馬鹿兄弟は、手を変え品を変え妨害の色気を示して来た。三角公園が竹竹者の身に移ることは、セクターのそれよりと既表の釜ヶ崎秩序を根柢からくつがえされることにつながるからだ。

八月十三日、夏祭りオ一日目の日程は、のど自慢大会から映画に移る時のマワサに電線を切られるという妨害を除いては、一応無事に終つた。しかし、午後、三角公園を根柢にするノ三屋暴力団溝橋組は組員一人が実行委メンバーに、口を刺さるにつれてのを合図に、一斉におそひかかつて来た。竹竹者が一応引き上げた頃を計はらつての、木刀、バッド等の武装による衝打ちであつた。

十二時ごろのレいわ雨かなければ盆踊りは、いつ終わるか判らなかつた。というほどの盛況裡にである。へ何がここにゐるのか、今日の溝橋組との斗争で竹竹者の方に明らかなつたからであらう。

「夏祭り最終日」。天王寺の野外音楽堂で右翼の足利全日集会が開かれるというので実行委は少々緊張してゐた。救済とそれなりの対応と、負傷者への処置を真剣に考へざるを得ない状況があるように思えた。しかし話は思ひぬ方向に進んでいった。

日と暮れ、盆踊りの芳座である「すさ大会」と竹竹者が興じている時である。情報収集活動中(?)の私服の足元でおどろきの爆竹が破裂したことから、参加者一名が逮捕されたのだ。この日の警備は、右翼の大会とあって三角公園の周囲を私服で埋めるという、さしめて陰険な方法がとられていた。その参加者は圧倒的な私服に取押えられ、奮還するすべとなつた。

すさの逮捕理由などの釈明を求めた代表が西成署へおどむく。すると「十時にはつきりたこと云う」と一担追い返される。そして約束の十時に

結果として、十三はりさめなければならぬような負傷者を出したものの、実行委溝橋組は、夕夕と出された。竹竹者の武器は足元に落ちていた木片くたなく、そしてその木片が足りなかつた。嘆かざるを得なかつた。

しかし溝橋組との斗争は三角公園がノ三屋のそのか、竹竹者のそのかという基本的命題を賭して行なわれたものであり、そこであつたのはギラギラとどきすまされた竹竹者の憎悪と敵と味方を峻別して対応する竹竹者自身の秩序の芽生えであつた。

私服は竹竹者自身と溝橋組との斗争と高見の見物を決めこんでいた。そしてその結果は落胆せざるを得なかつた。溝橋組との緊張状態が一応解けた三〇後今度は右翼大日本正義団一〇名程が特表の乱斗棒を用意してやつて来た。これ以上負けを見るのはくたなかつたから、その時はじめて制服が官が登場し、大日本正義団とされあつた。行儀よく逮捕されていった。実行委のメンバーは会場を守りきるため、全員着カンをとつて、一夜に臨んだのだ。二日目は「すさの割り」盆踊りとスルーに進み、直接の妨害もなく終えることができた。

再度西成署に向うと、今度は「お方」には何と話すことはなかつた威圧的な態度で応じた代表者数名は又字通りつまみ出されてしまった。

祭りのヤケウから、この日、反事情が竹竹者に報告されると、祭りは中止し、すさ抗行行動が起こされることになつた。

抗行のデモが三角公園を少く出た所で西成署直轄警ラ隊に阻止される。一担退いたものの二度目は完全に突破することが出た。ところが西成署が開始に到着した時である。先頭から順に座り込みを開始する。先頭は「すさ」の先頭は私服の手に上り、アツという向に署内に連行されていった。これは批判以外の何ぞのでもない。信がられなかつた。この光景が展開される。抗行する竹竹者の頭上にはナチス棒が振り降ろされる。又、何名かが連れ込まれる。

強制連行された者は何ら逮捕理由はない。強引に云えば道路交通法違反ぐらしか。となると西成署が江で得る大義名分はたゞ一つ、公衆保護である。西成署の十八番と云うべきな。

(3)

(2)

警匪法第三条一項。精神錯乱又は泥酔のため自己又は他人の生命、身体又は財産に危害を及ぼすおそれのある者」はこれを保護しなければならぬ。この規定は保護時間か二十四時間を越えざる限りければ向題にはならぬ。これは戦争のファシズムの進行過程で濫用された「保護検束」と何ら変化なく、そこには「保安処分」などの責を併せていることのできる。このようなことが平然と行なわれるその根底にあるのは警察官個々の、労働者に対する露骨な差別意識であるだろう。

翌朝、多くの労働者が身柄拘束をとりかれ、西成署から出て来た。ある者は「お前は泥酔保護だ、お前は泥酔保護だ」と有無を云わさず保護房に放り込まれ、ある者は「ホラ検が入って来た。ホラ、ワメケエテ公」となぶりそのにされた。

「夏祭り」は多くの泥酔保護者と逮捕者で、その暮れを閉じてしまわなかつた。よりラジカルでより陽気な「夏祭り」に引きつられ、それは浪速区内に於いては展開されたのである。

八月十八日、逮捕者11名中9名の勾留請求がなされた。

れ、尋問をいつせいに開始された。残りの2名は17、18日にそれを釈放され、勾留請求があつた9名中2名は逮捕中求状でどって起訴済みであつた。勾留請求のあつた9名のうち6名は請求が却下された。起訴された2名はやむを得ないとして請求の通り、そう一名は検対のミスで処置の施せなかつた労働者であつた。事態にあつて乱発された検察側の準抗告をすべて棄却されたのである。「起訴できるものを早くうち」という検察側の方針は逮捕の不当性をこまみすための方策であり、たうた2名のみ起訴できなかつた事実と、勾留請求すらまとまらぬ通らなかつた事実とは、当日の警備のいいかげんさを如実に証明してゐるだろう。

起訴されたうちのNさんの容疑は道路交通法第七十六条第四項第四号違反という全くお話にもならないものだった。「石、ガラスびん、金属片その他道路上の人、若しくは車両等を損傷するおそれのある物を投げた」というのである。これは交通のひんぱんな道路において遊戯をし、ローラースケートと全く同じ罪状であり、たまたま警察側のメントウを保つためだけに起訴されたといふ云いようがない。

昨午の5時生じた大暴動以来現在までの逮捕者を統計すると、すでに二百名を突破してゐる。今年のもう1件事件以来の逮捕者だけでも五八名という多きにのぼるのである。この数字は表われてゐるのは

光洋争議についてその3

そうこのことである。同じ日雇いをこてけるA氏が、鉄筋の移動作業中足がとつれてたおれ、持つていたマンボと鉄筋の間に左手親指をはさまれ、打撲、捻挫した。現認書をこぶく書いた身は、聖徳病院へ運ばれて行った。

院長は、A氏に對し負傷した部分にリバーカーを当て、包帯を手いただけだった。労働者を大抵下の取扱いをする医者、人間でと大でと金を多く出す方を大切にする。これが今の多くの医者の姿である。せこけな医者殿、お前さんがたの身の回りを見ればいい、お前さんが使うそのの中で労働者が作るだとの、外のものがあるか、家財物を生産するか、

連絶な強圧状況とととと、そのいつ状況を収め自らが造り出さざるを得なかつた。諸斗争の高揚とそれを支えた労働者の自立である。そういつて状況と現実の労働者の利益を守り、いかに運動ととととととさせるかな、現在の釜ヶ崎で向われいてゐるのである。

釜ヶ崎救護会へつづく

それくらゐのことな分ならぬのな、負傷した労働者を親身にたつて治療するに医者なんか居なくして、院長は通院七日と書いただけで、明日から仕事に出れるとA氏に云つた。明くる日A氏は痛む左手をなほしながら仕事に出た。光洋の手配師は云う。「仕事はせんとええ、ぶらぶらとけ」と、親会社の下級取組のIとSとととと云つた。だが一見よくととと云ふ云ふの裏に、労働者を泣かせる無事故Xヶ月という数字が浮き出でくるのである。労働者の事を思ふなら、傷かなあつるまで休業させれば良いのである。人身争収の為に会社は、労働基準局に

にりまし、立入検査もろりと行う。それを防ぐため
に、労作者が泣かされていろいろのである。危険な作業
現場を安全にすて事故をへらすのさなく、労作者の
屈辱的犠牲の上に無事故メー月と書き出されるので
ある。

労作者の皆さん、自らの身体を守るために、矛に
に起る上からなければなりません。さうなら限り
労作者は常に資本家の犠牲になってはならないはず
なのです。私は早急に光洋、国光と斗争さうか
を見つけないければならなかつた。

「君、さうは乱入へ行つてくれ」と日雇いの丁氏
が云つた。彼は日雇いの労作者ではあるが手配師に信
用され、一応日雇いの仲間の班長と目されるので、

手配師を引っぱり出すのは、この丁氏と、さめる二
人である。私は「行かない」と云つた。怒つた丁氏
は、「俺の云う事を聞かないのなら他の現場へ行く
ぞとらう」と、カッカして休憩室を出て行った。す
ぐにマイクログラスの運転手を来て「おあ、さようは
三庄へ行け」と云つた。私は少く抵抗したが折れて
三庄へ行った。なんと手配師を引っぱり出す手だ
てを考へながら。

年間三百名の行旅病死者の死を生かすために！ もつともつと具体的な徹底的な調査研究を。

金ヶ崎では、我々の友であり兄弟である労作者が
毎時三百名以上、行路病（行倒れ）者としてへ殺さ
れていく。多くは新持品をなく身銀をなく無縁仙と
して……。ある兄弟は路上で青竹の中に凍死、また

別の兄弟は酒に酔ってミソに首をつら込んで倒れて
くたし、一方肉体的生命の「生」は必ずしも社会
的生命的「生」を意味しない。「死」は必ずしも社会

と、我が下層労作者の社会的生命は、日々死に至ら
ぬめられにける。資本家とその先づ「専門家」、
学校に出して、下層労作者が歴史の主役になること
を隠蔽され、単なる社会のワギ役だとごまかされて、

—— 三百名行路病死者の肉体的生命の死は、二
万名の金ヶ崎下層労作者の社会的生命の死の代表で
ある—— 我々は今日、彼らの死を山々にせず生
かさなければならぬ。そのために我々はまず「下
層人民に服務する」立場から、とつとつとつとつと

の事例について、徹底的、全面的な調査——彼ら

幸い、本当につまり具合には、私はその現場で負傷
した。治療をうけたら医室へ行った。たついでに、外出
し、同志に電話をして、風呂にも入る。から飛躍の
むとつとつ争を伝えた。

私は風体再度、丁氏に抗した。「あんたさ

労作者なら、俺さ釜の労作者や、労作者同た何で命
守らるべから生きたりせなあかぬや。お互い、なはい
んだのおかたで俺は指は負傷した。責任をとれとは
云いながら、何と云え」とまくくたして、彼はハム
が豆鉄砲をくったよな顔をして「手配師呼んで来
ろ」と云つた。

争はずお書きとありに運んでいった。

丁氏を光洋側の人間とは思ってなかつたが、彼の手
配師にへつらう事は、私自身のいままさどつて来た
態度であつたために、私自身に向けるべき批判
を迷して丁氏にぶつてしまつた。日当をかだかニキ
二百円で労作者の魂を切り売りしていられた自分をす
かしく思うと共に彼をさすの端に巻き込み、へつ
らいを怒りに転化させることを思つた。

はいつた誰かの上うに殺されたのか、つま
り、彼らは何を求め、何に抗して死んでいったの
か——を進行すべきだと考へる。

家の「宗教家」「坊主」共は、先祖たちの死を生
かす、その遺産をうけついで争はるさなう、叔父は、
医者、教師、ポリ公、弁士等と同じく、人の精神
にわけ込み金山にたくって飯を食う「先生」の類だ
から。

この調査研究を通じて、現在運動の直面して行
壁、及び、その原因としての、真の友と団結して真
の敵を攻め取する争を出来てないことを突破する
し、またさうしなければならぬ。

友人諸君！、以上の呼びかけにこたえ、今すぐ共
に行動を開始する程、さうさうゆる協力を訴えら
れ。

※なお、引きつづいて仲間を「いっさま者」「用な
き者」として、隔離、管理するためにさかさない精

精神病院——金ヶ崎からはほとんど、泉角に集中する
名精神病院に送り込まれる。「鬼の安田、蛇の園
分(病院)……」などといわれる——の契機は入院
患者追跡調査をやったときだ。また「犯罪」とい
う形で(怒り)を負ける方向に、爆発させ、拘置
所、刑務所にぶち込まれた人たちの調査もやりたし。

「彼らの立場に立ち、へ苦しめ、くやくさ、怒り」
を共有して」やっていた。以上

一九七二年九月二十四日(二十五日加筆)

呼びかけ人有志(連絡先)大阪市西成区東田町44
金ヶ崎医療を志せる会 電話六三二二三八三三

搾取なき自由の国、闘い取らん。

金ヶ崎夏祭りの最終日、ほくは「爆竹学生」とや
うで「暴行罪」を云々あげられ西成署に逮捕され
ました。斗争者たちの救済、救援の方向、斗争士
人々の努力のおかげで、西成署一地検の拘留請求、
東京移送等の陰謀を打ち破り、19日釈放を勝ちとる
ことが出来ました。ここに同志友人諸兄への感謝の
意を表わすと共に、更なる斗争へむけた決意表明を
行ないたいと思います。

ほくは、東京都内の某定時制高校に通う斗争者で
す。定時制高校生とはいえ、金ヶ崎の志き出の
暴力支配、暴力団、警察との四八時中の緊張関係、
明日の身知りず、持ち物は紙袋一枚、体力尽き果て

れは行路病患者とくろく治療を受けられず死ん
でいく。否、殺されていくという金ヶ崎斗争者の生
活から比べれば、まだまだ都市生活、市民生活に近
い生活を送っています。路上でテロや日用雑貨品
が売られていたり、Gパンが六十円だったりと
景は、ほくには異質に感じられました。そんなほく
か、三角公園の中の武骨な雄々しいヤケラのまゆ
りに居ると、金の斗争者は何度も声をかけられま
た。「学生さん、ゆくはあんたらが好きやぞ、吹け
け飛ばすようなゆくらみたらなパンコに、こんど立派
なヤケラまでこえてくわいて。祭りや、盆踊りなん
このほくとは何年ぶりだ」と「頑張りよ、頑張り

よ。」と鼻を通した声を握手を求めてくれた斗争者
差し入れだと言ったスイカを十個を貰って来て「食
えや。」と口にくわえてあげた。十個も食べきれ
ないのでまわりの人に分けてまわると「あんちゃん喰
力の失くなるぞ、早よ喰えや」と心配顔……。
「大変だ」といってこどもとろくに右翼の襲撃の情
報を聞きつけて駆け込んで来た。おっさんのごつ
ごつの手を握りながら「この手に、なにが何でも飛
ぶさやならん」と思ひ、「ここの信賴を勝ち取
ってきた釜の活動家に対して頭の下がる思いでした。
祭りには初めての試みであるのに、多くの斗争者を
集め、特に盆踊りは、身振りにはほとんど目茶苦茶、
流れと反対方向に踊ってまわる人がいたり、活気に
満ちていて、川谷に釜の斗争者を集めてみられたり
いるのかとこのことを感じさせられ、「歌え踊れ」
と、曰共、民衆とは全然ちがうもの「生々しさ」
が迫ってくる祭りでした。
※定時制高校が更に解体されてへついに学下をあげ
られ、恥を喰々と変え、金ヶ崎に存在する。出稼ぎ
の父が破綻の想いで釜に居るなら、子は集団就職で
上京、定時制高校に通う。家に居る父、金を送ら

ぬ父に對し子は憎悪の念を持つ。
冬山則天の父を思ふ、くなく、やなでその子と
市民社会から最後の一撃を受け叩き出される。定時
制高校生、中卒斗争者、釜の關係は下層社会の悲劇
限的流動現象ではあるまいか。定時制の解放は、
金ヶ崎の解放なくしてありえぬ。釜の斗争とこ
かり結合して定時制で斗争決意を以てる。
去る五月十五日知縄人民の血の叫びを踏みこむ
暴挙に對して、我々は公然と機業放棄を呼びかけ、
校庭でヘルメット集合、示威を行った。その翌日か
ら、サークル室に集まる若き斗争者の眼が違った。
その眼は確然と政治を求めている。資本主義社会を
打倒する共産主義の政治を求めている。同じだ。
三角公園で「暴力団の襲撃を弾劾し、西成署に抗
ぎする」という釜共闘の立て看板を群がる斗争者のひ
とりが興奮して叫びだしたのを覚えてる。十一番
渡り仕事をやるのなわくらパンコや、斗争者が年
に一度の無りをやるのなわくらパンコや、この三角公園
は、ヤケラのそのそのねえ、赤り公のそのそのねえ
だれのそのそのねえ、ゆくら斗争者のそのそのねえ
り公のそのそのねえ、とそえらくねえ、奴ら税金で喰っ

とるくせに平気で主人の労働者をなぐりよる」ヤジ
 やかけ者を回りに「辻説法を続けるお、さんのお顔に
 汗が流れた。一労働者が正面から天下に何、て異議
 申し立てる。大の多とって政治を語る。ここから
 革命が始まるはずとこから始まるのだ。文字どおり
 「労働者の社会主義的積極性」である。この奥を定
 時制労働者と大いに持つている。何故「朝七時に起
 き仕事に行き、学校に行き、十一時に帰り、あとは
 寝るだけ。給料は安く、卒業しても何の保障もない
 孤独で頼れる友も少ない」そんな生活に、疑問を持
 たつていられるだろうか。自分を生かせしめたい
 との、資本主義という怪物にむけたとき、斗いは開
 始される。残念ながらこの積極性は、創価学会、若
 い根この会、反青、舞に多くを吸収されている。
 若年依償金労働者、中卒者、都市の底辺の怒れる青
 年たちを解放する斗いを定時制の最も抑圧された月
 と結びついで定時制大反乱として立ち抜くこと、こ
 れがオノの釜の斗いに対する解答である。釜ヶ崎は
 全日無教に存在し、定時制にも存在すると共にまた
 一つの存在である。オノの万全の斗いを孤立させてはな
 らないということである。西成署は「釜ヶ崎の力

を残りすべから」とわれぬ散らぐ、労働者千人の
 中に私服二百匹を入れている。
 全日支援組の確立、これはオノの解答である。
 西成のシカゴ、オトシマエは必ず行ける
 釜ヶ崎解斗争の勝利万才、暴動勝利、西成署粉砕
 仲間を即ぐ解放せよ
 若年依償金労働者解放、定時制反乱をぶち抜く
 ザエ、フロシマリ革命派の大連合を
 解放戦線を建設せよ
 青界革命戦争勝利!!
 ○×高校定時制解放戦線 労働者○○団
 八月一日〜九月十四日
 釜ヶ崎に燃ける弾圧状況
 山田俊治

日付	斗争名	逮捕者種	起訴者
五、一	メーデー斗争	二名	〇名
	(反乱)	〇名	〇名
五、二八	鈴木組斗争	二名	二名
	(反乱)	〇名	〇名
五、二九	(反乱)	十名	〇名
五、三〇	(反乱)	〇名	一名

日付	斗争名	逮捕者種	起訴者
六、二八	鈴木組斗争	六名	三名
	(抗争)	〇名	〇名
七、一	鈴木組斗争	一名	〇名
七、八	鈴木組斗争	四名	二名
八、八		二名	〇名
八、一五	夏祭り	十一名	四名
八、一六		一名	〇名
九、一	パチンコ屋事件	四名	一名
九、一二	(反乱)	一名	〇名
九、二三	(反乱)	一名	〇名
九、十四	(反乱)	一名	〇名
総計		六五名	十七名

釜ヶ崎は活火山である
 ここには怒念のマグマがうす巻いている
 復讐の炎は、ドス黒き煙になくれ
 ヌラヌラと不気味なぞえつづける
 うっ積された怒りのエネルギーは
 宙ざされを撃ち破る打ち破るうと
 侵略し続ける
 噴きあけろ
 とかくてくまへ
 屈辱の青界を
 まやかの広野を焼きつくせ

プル中・流・乱暴

- △ 櫻植訂正
- P2 上段4行目 既表↓既成
- 下段4行目 既表↓既製
- P5 最後1行、4字目の空白↓以
- P7 下段4行目 家↓今
- P8 上段2行目 名↓各
- P13 共同作業の一層の... の筆者は中村豊秋

《持続した闘いの基盤を》

釜ヶ崎には今池生活館、愛隣寮という公共の家族の入れる住宅がある。そこには入居者の子供の保育所もある。しかしそこに入居するには住民登録が、この地域に登録してあって、高給取りしか入れないくくみになっていて。釜ヶ崎労働者の多くは、過去に反法的な事をして市民社会から追いやられて来た。何らかの形で権力に抵抗して監禁を求められ流れて来たのである。だから互いに本当の過去は知られたいし、聞かないという。住民登録どころではない。「生活館」「愛隣寮」などといかに労働者のためのものであるかのように存在しているが労働者のために何一つしてない。

釜ヶ崎の夫婦者は子供がほしいが、子供をつくるはあつなくてくれる所がないので、女は子供がなくなる。子供をつくる事は働く事をうけい家事労働に。こぼりつける事を意味する。それと夫の人の収入にたよれば日雇いの家庭では重労働の夫は月十日、十五日が労働の限界になり、保健の取れない月(日雇いの労働者は二月に二八日休けは次の一ヶ月間、保健が使えない)に病気でとまれば一家心中か、又

は、乳児を殺したりでよく見られる。最近新聞でよく見るが、そこ「母が子供を殺した」として、この母を犯罪者としてせめることか出るだろうが、優生保護法が改善されようとしている現在に於いては、いっそう深刻な問題である。又、子供が大きな家庭ではアパート三疊一間を親子三人暮らせば当然子供は性的に早く目覚めてくるし、夫婦仲んかその目で見せつけられ、子供はあたり散らす親もいる。こういう状況の中で将来子供は何を考え、どう行動していくのか、結局はヤリヤ等の反権力、反労働者に吸収されていくのである。

釜ヶ崎に於いて、この問題に取りくまなければ、労働者の対面成り身、悪徳多配師追放斗争をやつて労働者の基盤となる生活は守れないし、やりつはなくの斗争になるのではないだろうか。まさに釜ヶ崎では子供を生むのは両親の意志に基くそのではないで、日当が子供の出生を管理、抑制するものである。私は釜ヶ崎に生活して、いれゆる夫婦者であり、夫は日雇い労働者であるが故に、こういう問題を自分自身の問題として、つぎつげられ

くる

今、夫婦の例をとって書いたが、ここには単身者が全体の七割を占めている。ここに女をよせつけたいのは、警察、マスコミ等の偏見による大衆への差別の流りこみからくる。

「日本の発展」の土台をつくり作り捨てられてきた労働者を「労働者」と呼び、人間としての労働者としての権利を主張した者をパクリ、酒をのんだ、のまないヒカカハら不泥酔保護のなくれおの

共同作業の一層の拡大を

「釜ヶ崎のこの一年」

釜ヶ崎解放の闘いを一部の活動家の独占物としなげために、共同作業へ集団で共同して向かおうとするを増やしていくための、いろいろな試みが行なわれてきた。

八西成分会と別れる

昨年まで、俺達は組合へ全港灣面成分会の中で労働者の大衆的参加をえて、固交を一つ一つ積みあ

中でリン子をしていて。今までの「泣きぬけ」の

状態に労働者を押さつけようとポリ公は日夜活動している。労働者が泣きぬけにさせようとする、持続した闘いのできる基盤をつくらせていきたい。

夫婦の意志と基いて自由に子供を生める闘いを共に調査、研究を通じてやっけていきたいと考える人は編集部まで連絡を。

△三好恵子△

げていた。固交の意味にはいろいろ問題がある。けれど、毎回参加者が増え、斗争労働者が増えている。しかしそれと、短期一時金(七一年夏)の配布方法をめぐって、組合幹部との対立(組合費の徴収方法を天引きとするか、自主カンパにするか)のため、俺らは大衆を信頼して自主カンパにするべきだと主張し、全港灣幹部は、そんな事は組合活動に必要ない金が集まらないと拒否し、ケンカがわいた。俺らは組合活動から離れたい。

以後組合と、俺らとの対立は深まり、組合は大家参加の活動を否定するようになった。週一回や、この分会集会は、会場がないという理由で中止し、二三ヶ月に一回や、これが大阪府団交も、府との密約によつて中止した。ところが今日に到るまで行なわれていない。組合幹部の請け負い主義、代行主義は一層強まり、大家の批判に耳を傾けないようになった。

昨年度の年末一時金斗争、今年夏の一瞬金斗争にそれぞれ一度ずつ、大家団交をも、これに於て昨年は建設業協会と大林組、今年は竹中工務店と、それとも、そうした圧力をかけないで一瞬金斗争のメドが立たないから、大家をゴマカして使ったようだ。最後のまじめはいつモボス交で行なわれ、総額がいくらか出て、分配はどのようにして決定されたのか、全て教人の幹部で秘密裡に決められ、たすねでも教えてもらえない。代行主義、請け負い主義、秘密主義は、皆何者から積極性や行動性を奪い、一組合にまかせておけばよい」といつまかせ主義、お頑い主義を生み出していく。

以後、俺は個人として、文化、体育活動と医療活動を別々の者として行なうに方針を、資本家の側からは二、三年前までよく行なわれていた。西成署防犯課長が主宰する文芸サークル、裸の会、警察音楽隊の定期演奏、防犯協会、日赤奉仕団による夏まつり、防犯コーナ―主催健康診断、長々、釜ヶ崎に広帯をやることを考え、そのための物的的設備として、とり合ふか、共同使用事務所を作る事を追求した。

釜ヶ崎防犯者の共同事務所―野島会会成立

しかし、実際には金がないため何々実現しなかつた。や、とある皆何者の取柄解雇の斗いの中から金を中心に、多くの人の協力によつて、五月二日の、事務所向きをする事になった。むかし夕方ラマエや規則を作らな、使いたい人は誰でも選考委員会が許可をえれば使える事にした。そのため、あんなもんは、すぐつぶれる」といふ事すらできていた。しかし、五月日、を今でもおどかす小川に存在し、とりわけ、この間活躍している釜ヶ崎へ暴力手前師造放電う崎共斗会議」と、その活動

釜ヶ崎野島の中から

その後、西成分会は年末一時金斗争に取組み、それに俺らも参加しながら、独自の「越冬対策実行委員会」を作り、西成分会にも呼びかけた。分会は、参加すると述べながら「一時金が解決しなけりば、越冬対策はできない」といふべ、結局一時金解決後も、一時金断絶(タオルをそえて)以外何もなかった。

俺らは、前年の経験から、「同情して、救ってやる」といふ態度に反対し、それを作らなくすため、皆何者との共同作業を追求した。(文化、体育活動を除くと、やはり、取捨する者と取捨られる者と、この関係の中にある「いやらしさ」へい言葉が、みづからない「みだいなものを解決しきること」はできなかった。たまたま。

しかし、前年と違い、文化、体育活動(ソフトボール、バドミントン、すもう、のど自慢、もちつき)、医療活動も行なわれ、「俺たちの正月は俺たちで作ろう」というスローガンの下、新しい共同作業ができたことは、一つの前進だった。

の発展の一翼を、目立たないながらも保証してあげた。

ここからの問題として、共同事務所とはいはなから、実際には、釜ヶ崎の専属事務所のようなあり、狭いための、活動家以外の皆何者は使用したく、雰囲気があり、もっと広い、集会もやれるような所で、皆何者が誰でも使いたい雰囲気をも、を場所がほしいと思つた。

釜ヶ崎医療を考ふる会の発足

越冬対策委員会医療班が、恒常的組織として「俺たちの体は、俺たちで守ろう」とをスローガンとして、「釜ヶ崎医療を考ふる会」になった。いままでの所は、多くの皆何者の共同作業としての発展はほとんどなく、少数の人間の請け負い代行になりがちである。へ詳しい報告は、医療を考ふる会機関誌「いのち」を参照して下さい。いま、こうした問題を克服するため、病障への患者会を作ろうと努力している。やはり、運動の主人公をし、かりと作り出していかないと、

少数の人間の代行、請け負いと成り、事務屋、告務屋になつてしまつた。

へび一回釜々崎まつりの成功と困乱

越冬対策の文化、体育活動を進展させるための釜々崎まつりを「神戸大阪の橋」へび一回で呼びかけ、それに答えて、七月下旬、実行委員会が作られた。

当初は西成分会の下に実行委員会を置いてやる予定だったが、三日前に成り、突然、豪雨一時金で解決していかぬので延期してくれと言ひ出したが、多くの市内者が予定通り実行委員会をやることを要求したので、西成分会は成り、釜々崎や医療を志する会、映画の会の人々を中心として、予定通り八月十三、十四、十五日の三日間に行われた。この行方成りた。

しかし、救済会のレポートにもあるように、公園の借用権をめぐり、看台バックをやつていろいろヤクガと闘つた。たり、爆竹を鳴らした定時制高校にたいしていろいろ糾弾がバク出たりして、それらへの対応をめぐつて、実行委員会内部に困乱がおき、結局一しに終括は出さず成りた。

俺の考へでは、俺たちがまだ「斗い」の中で戦つて居り、芝居の小さな素人のゲル―ズが陽の目を見せた。生活は一新された。古い形式のもとではなく、将来の社会の萌芽を含んで「ハバトナム」解放民族戦線」のような経験をもたなりが故に、斗いと文化、体育活動を対立したものと考へ、統一することの出来ないまに行なわれたため、斗いが始まつたとしていゝのに、斗いと文化を分離する日和見主義、大衆を牽きこむから続けるという追随主義に陥ち入る傾向――俺もそうであつた。自己批判してゐる――と文化、体育活動を興げたり否定する極左好傾向と成りか出た。へび一回毎に三日目の警察への抗議行動の中にあらわれた。

叔父や資本との斗いの激しい時は、文化、体育活動はとてつれば日和見主義のレッテルをはられ、又逆に斗いがないため、人気とり政策として――共産党や民権会よくやつてゐる――文化、体育活動を行なうという左右の諷刺に陥らなかつた。政治的斗いと文化、体育活動との対立を克服し、どちらの斗いも劣勢者の共同作業として、統一戦に行なつた。それが成りた。